

「死を人はどのように受け入れるのか」

このテーマを聞いて、私の頭に浮かんだのは、かつてインタビューしたある女性の話です。

私は宗教学や民俗学の立場から、巡礼を研究しています。巡礼は、宗教的なものや聖なるものと関連付けられた特別な場所「聖地」をめぐる旅です。私がこれまで主に調査をしてきた四国遍路¹⁾は、弘法大師空海にゆかりの 88 の聖地をめぐる巡礼です。近年、社会的な関心が高まり、徒歩で回る「歩き遍路」がブームになったこともあって、ご存じの方も多いと思います。私が彼女にお話を聞いたのは、ちょうどそのブームが高まったころ、2001 年の春でした。

黒田さん（仮名）が、歩き遍路に出たきっかけは息子さんの病気でした。突然余命 6 カ月の宣告を受けて、黒田さんは苦しみます。どうにかしたいと考えるなかで、黒田さんは息子さんの病気平癒を祈願しての歩き遍路を思い立ちました。黒田さんは息子さんを看病する傍ら、時間を見つけては「必死に歩き」、半年かけて 88 カ所を回り終えました。しかしその甲斐なく、息子さんは亡くられました。ですが、黒田さんが四国遍路で得たものは、救われたという感覚だったそうです。実際、黒田さんはその後、息子さんの供養とお礼参りを兼ねた 2 度目の巡礼を行っています。

なぜ、願いは届かなかったのに、救われたという感覚を持つことができたのでしょうか。それは巡礼の道中で、同じように苦しみを抱えた巡礼者との出会いによって、彼女自身の苦しみが変化したからだ、と黒田さんは語ります。

巡礼に出立する前、黒田さんの苦しみは理不尽に突き付けられた個人的で絶対的なものでした。「なぜ自分だけがこんなにも辛い目に」という思いです。ところが、巡礼を進めていく中で黒田さんは、苦しみを抱えて巡礼しているのは自分だけではないこと、そんな他者の苦しみを「見舞う」ことができること、そしてその「見舞い」が確かに相手の気持ちに届くことなどを発見していきます。

ここで「見舞い」の方法として見出されたのが「接待」でした。四国遍路では、巡礼者に飲食物や金銭などさまざまな施しをする文化があり、これを「オセツタイ（お接待）」と呼んでいます。通常は巡礼者ではない人が巡礼者に対して行いますが、ある時、黒田さんは巡礼者から接待を受けるという体験をしました。この接待に「励まされた」黒田さんは、「この人も何か苦しみを抱えているのかな」と思った巡礼者に接待をするようになりました。そして巡礼も終わりに近づいたころ、黒田さんが接待をした若い女性巡礼者は涙を流します。その涙によって、黒田さんは自分が巡礼で得たさまざまな気づきは間違っていなかったという確信を得たのでした²⁾。

この話は、エリザベス・キューブラー・ロスの「死の受容」³⁾のプロセスに似ています。アメリカの精神医学者だったキューブラー・ロスは、死にゆく患者さんの多くが「否認」「怒り」「取引」「抑うつ」「受容」という 5 段階のステップを経て、最終的に死の受容に至ると述べています。

黒田さんの場合は、死の対象が自分自身ではなく家族であることが異なります。巡礼前の絶対的で個



峠道の歩き遍路
(2010 年筆者撮影)

人的な苦しみが、「否認」「怒り」、病氣平癒の歩き遍路を行ったことが「取引」、最終的に自分は巡礼で救われたという感覚に至ったことが「受容」に対比できるかもしれません。また、無力感、何もできなくなる状態である「抑うつ」のステップについては語られていません。これは歩き遍路が歩み続けなくてはならない実践だからとも考えられます。

2019年5月、「1300年つづく日本の終活の旅」として西国三十三所観音巡礼⁴⁾が日本遺産に登録されました。日本遺産⁵⁾は2015年に文化庁が始めた新しい制度で、個々の文化財や歴史遺産を我が国の文化・伝統を語る「ストーリー」でパッケージ化する試みです。西国三十三所は観音菩薩をめぐる巡礼で、四国遍路と並んで日本を代表する巡礼です。その西国三十三所を包括するストーリーに「終活」が選ばれたことは大変興味深いことです。

巡礼は人々のさまざまな思いを受け入れる場ですが、「死」なるものをいかに受け入れるかというテーマは、巡礼の伝統そのものと言っても良いかもしれません。多様な価値や考え方があるなかで、仏教や民俗宗教が継承してきた知恵を宿した場のひとつが巡礼です。

「生きとし生けるものは、いつか命の終わりを迎える」⁶⁾のだとすると、私たちは死から逃れることはできません。黒田さんの巡礼物語の結末も、息子さんの余命宣告によって抱え込んだ苦しみがその死によって永遠のものとなったと同時に、苦しみは互いに見舞うことができるという気づきによって、共生可能なものに変容させたことによる救いの感覚でした。巡礼が提供するの、死にいかに向かい合うか、そして、死と共に生きるとはどういうことか、そんな知恵だと考えられます。

<参考文献>

1. 星野英紀, 浅川泰宏: 四国遍路—さまざまな祈りの世界. 吉川弘文館, 2011
2. 浅川泰宏: 巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化. 古今書院, 2008
3. キューブラー・ロス: 死ぬ瞬間—死とその過程について. 中公文庫, 2001
4. 西国三十三所 <https://www.saikoku33.gr.jp/> (2020年2月1日閲覧)
5. 日本遺産ポータルサイト <https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/> (2020年2月1日閲覧)
6. 1300年つづく日本の終活の旅, 日本遺産ポータルサイト <https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story074/> (2020年2月1日閲覧)